

ヒューマンライブラリー実践報告

—多文化共生社会の実現を目指す試み—

名古屋大学国際教育交流センター

渡 部 留 美

1. はじめに

ヒューマンライブラリー(以下、HLと略記)は、「障がいをもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は1対1で、あるいは1対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』(イベント)である」(横田2012, p.155)。発祥はデンマークで、友人が暴漢に襲われたことがきっかけであった。「現在世界で起きている暴力行為や武力侵略は、人々がお互いのことを理解し合っていないから」という思いのもと、2000年にデンマークのロックフェスティバルにおいて一回目のHLが開催された(駒澤大学坪井ゼミ編2012)。以降、世界中に広がりを見せ、日本では大学、自治体、NPO法人などが主催者となり、関東圏を中心に開催されている。

HLの目的は、「偏見低減のための社会実験」(坪井2012, p.172)であり、ベースにある基本的な考えは、①社会が多様性に満ちていることを知る、②人は誰もが多様であり、しかも多様であってよいということを受け入れる、③人は誰もが何らかの偏見をもっていることを自覚する、④偏見の低減を目指して立ち上がろうと志す、⑤多様性を楽しむことである(横田2012)。

HLには読者のもつ偏見を低減させるという効果の他、本にとっては、自己を語ることによって自信と勇気を持つ機会になり、自己を構成し、態度変容を生み出す効果があるという。また、主催者(スタッフ)となる司書は、学生がゼミの一環として活動した場合、自己教育力・社会人基礎力・就業力等を向上させる潜在的機能があると述べている。つまり、HLに関わる全構成員にとって、それぞれ効果(読者効果、語り手効果、主催者効果)があるのだと説明している(駒澤

大学社会学科坪井ゼミ第29期生2013)。反面、一見「見せ物小屋」のように見える危うさもあるとし、大学で行う場合などは指導する教員がある程度の覚悟がないと取り組むのが難しいのも事実であるとしている。

偏見低減に関する研究として、これまで様々な接触モデルが提言されているが、浅井(2012)は、カテゴリーを明確化して、外集団成員の情報を更に得ることができる接触方法としてHLは好例であると述べている。すなわち、「完全に自由な接触をする場合と比べて、話し手と聞き手に適度な距離感を与え、両者の間の緊張感や不安を緩和する」(浅井2012, p.116)という。

筆者が、最初にHLに出会ったのは、2012年、第33回異文化間教育学会において坪井健駒澤大学教授が「ヒューマンライブラリーの可能性を探る」という題でHLの紹介と実践についての報告をされたときである。その場で参加者から様々な質問や意見が出され、HL開催には念入りな準備が必要であると感じた。その後、名古屋のあるNPO法人が2013年5月にHLを開催し、参加してみたが、是非名古屋地域において大学で実施してみたいという思いが強くなった。

2. ヒューマンライブラリーの実践にあたって

HLの構成自体はシンプルであるが、準備作業に多くの時間と神経を使うと言ってよい。それは、「差別」「偏見」「マイノリティ」「障がい」といった、ときには注意を払って関わらなければならない事項を含んでいるからである。前述した学会の際に参加者から挙げた質問やコメント、坪井教授から伺ったHLに対する否定的な反応を整理してみると次のようになる。

1点目は、ゲストを「本」と見立てて、人間を貸し出すという表現が適当であるかということである。人をもの扱いすることが失礼なのではないか、という意

見である。2点目は、偏見を受けやすい方をゲストとして登場いただくことで偏見をかえって助長したり、「本」と「読者」との間に壁を作ってしまうのではないかという危惧である。3点目は、「マイノリティ」「マジョリティ」と区別することがそもそもおかしいのではないかという設定上の疑問である。こういった疑問や不安がでることは、当然のことといえ、これまで実施経験のある坪井教授も想定範囲内であると理解している。

以上のような意見があったとしても、「実践なくして証明はできない」との思いから、以下の点の課題について明らかにすることを目的にHLを開催してみることにした。

1. 上述した3点の疑問点についての「本」の方の受け取り方
2. 今回のHLにおける「読者効果」「語り手効果」「主催者効果」の検証
3. 今回のHLの方式における良かった点と課題の発見

3. 「ヒューマンライブラリー2013 in なごや」の開催

3. 1 開催までの経緯と形式

2013年12月7日（土）、名城大学において「ヒューマンライブラリー2013 in なごや」を開催した。名城大学国際交流推進センターでは、国際交流活動を行なう学生グループ向けに毎年研修を行なっている。その際、名城大学は名古屋大学の他、近隣大学にも声をかけていることから、国際交流に関心のある複数の大学の学生が共に学ぶ場となっている。2013年度は筆者が名城大学の担当者にHLの開催について打診したところ、賛同が得られ、本学国際教育交流センターとの共催となった。

開催日程を12月と決めたものの、筆者が一度だけHLに参加した経験があっただけであり、開催経験は全くなく、名城大学の担当者にHLの全体像を伝えることも難しく、どのように準備したらよいか、学生は興味をもって参加してくれるのか、などという課題が山積し、半ば途方に暮れてしまった。しかし、そのようなとき、駒澤大学で9月にHL研修会が開かれるという情報を入手し、名城大学の担当者と参加することにした。その結果、HLのイメージが共有でき、準備

物やスケジュール計画などについて研修から多くのヒントを得ることができた。

HLを大学でゼミとして実践する場合、学生がスタッフ（司書）となり、本集めやポスター作成、読者募集などの広報を行なう。今回は、ゼミとしての実施ではなく、また、時間的な制約もあり、筆者と名城大学担当者2名が中心となり、本集めを行った。その他の作業（当日の運営、事後の報告書まとめなど）のために、名古屋大学から2名、名城大学から1名の学生スタッフを加え、6名のチームを組んで実施することにした。

当日の流れは、セッションを3回行い、最後に振り返りと交流会の時間を1時間程度もつことにした。1冊の本につき読者は3人までとした。つまり参加する読者は、最高3冊まで本を借りることができる。今回は申込の際に希望する本を3冊選択してもらい、こちらでマッチングを行うという予約制とした。

3. 2 「本」となったゲストの方

今回のHLに来ていただいた本の方とタイトル、あらすじは、表1の通りである。

Aさんは視覚障がい（全盲）の方、Bさんは発達障がい経験者、Cさんは車いす利用者、Dさんは無国籍の方、Eさんは外国人留学生である。今回は大学で学生を対象にした研修であったことから、大学生が学生生活を送るうえで、知り合いになつたり話をする機会が少ないと考えられる方々に登場いただくことにした。筆者が、知り合いであったAさん、Bさん、Dさん、Eさんに、名城大学の担当者がCさんにそれぞれ会い、HLの成り立ちや形式、今回のプログラムの趣旨について説明を行なった。AさんとBさんはHLにおいて「本」の経験があったことから、比較的イメージしやすかったようであるが、学生を対象に話をする機会は初めてであるため、学生が興味をもってくれそうなトピックについて筆者と話をしながらイメージを膨らませていった。DさんとEさんは現役の大学生であることから、同じ学生にむけて話をするということで若干イメージは湧きやすかったと思われる。Aさん、Bさん、Dさんは、日常生活においてセミナーや講演をすることが多く、Cさんは以前に名城大学で講演を行った経験を持ち、Eさんは大学院生であることから、5名とも人前で話をするのが初めてというわけではなかった。ただし、HLの特徴である比較的短い時間（今

表1 本のタイトルとあらすじ

作者名	タイトル	あらすじ
Aさん	見える自分, 見えない自分, 両方の味方になる	29歳のアメリカ留学。それがもたらしたものは、19歳で失明してからずっと自分を自分で差別していたという衝撃。「見えない」という状態をプラスにするのも、マイナスにするのも自分次第。「違いを価値に変える」を合言葉に、自分だからこそできること探してみませんか？
Bさん	アンバランスが私のバランス	発達障がい当事者として、自身のうつ病、自律神経失調症、パニック障がいの紆余曲折の経験からコーチングでうつ病や発達障がいの方の就労支援を目指すコーチングインストラクター。具体的なコミュニケーションや行動のノウハウを当事者・支援者双方の視点から希望の「光」として届けます。
Cさん	障害者の生活（つくられる障害と自立）社会・親によって、つくられる障害	社会に声を上げていく、社会をバリアフリーにしていく。私たちのことを私たち抜きで決めないでほしい。私はだれもが住みやすい社会をつくっていくことをめざしています。私の今までの人生、社会をバリアフリーにしていくために行ってきた活動についてお話していきます。
Dさん	外国にいけない外国人	お父さんお母さんが難民で、私は難民2世にあたります。幼少の頃は両親も安定した仕事に就けず、厳しい生活をしていたこともあります。これまで「日本生まれ、ミャンマー難民子息」というプロフィールでメディアで紹介されることもあるDさんは、ご自身のアイデンティティについてどう思っているのでしょうか。ご自身が抱えている問題、夢を語ります！
Eさん	外国人・イスラーム教として日本の学校に通う	現在、多くの外国人が日本に居住しています。その理由は仕事や留学などです。また、その中には家族と一緒に滞在している人も多いです。その家族、特に子供はどのような生活を送っているのでしょうか。そこで、インドネシア人・イスラーム教徒として日本の学校で過ごした体験を1つの例として外国人の子供が日本でどのように暮らしているのかを話したいと思います。

回は30分) 内で、少数に向けて話をするという対話形式であること、それを3回繰り返すというスタイルはそれほど経験がなく、当日までそれぞれが試行錯誤しながら準備くださったものと思われる。

3. 3 「読者」となる参加者集め

本が決まれば次は読者集めである。名城大学の国際交流グループ学生、名古屋大学学生のほか、近隣の大学で筆者と日頃から交流のある国際交流部署担当者にも広報をし、参加者を募ることにした。ポスターには、日時、場所、申込方法のほか、HLの簡単な説明、楽しみ方などを掲載し、本については、タイトルのみにとどめ、詳細は掲載しなかった。これは名城大学の担当者と協議した結果、あまり詳細を書いてしまうと、イメージが固まりすぎる恐れがあるため、タイトルから自由に想像してもらおうということになった。ただ、これではHLの認知度がまだ低いなかで果たして申込があるのか心配もあった。実際に、最初に設定し

た募集期間を過ぎても十分な参加者が集まらなかったため、筆者と名城大学担当者の周囲で興味のある方(社会人)に個人的に声をかけることにした。結果的に15名の申し込みがあり、スタッフ6名も一部読書に参加することとし、合計21名の読者となった。

3. 4 当日の流れ

当日のスケジュールは以下の通りである。

- 13:15~13:30 HLの説明・利用同意書への記入
- 13:30~14:00 セッション1
- 14:00~14:15 休憩・移動
- 14:15~14:45 セッション2
- 14:45~15:00 休憩・移動
- 15:00~15:30 セッション3
- 15:30~15:45 休憩・移動
- 15:45~16:45 全体での振り返りと交流会

セッションが始まる前にHLについてその成り立ち

や定義、国内外での開催状況について簡単に説明を行ない、利用同意書を配布した。利用同意書には、規約として、「本を傷つけるような言動をしない」「撮影、録音等をしない」「ブログ等メディア上に公開しない」「本の方が苦痛を感じ継続困難となった場合には、貸出中止となる場合がある」旨4点掲載し、読者に同意いただいた。

申込時に本の予約を受け付けていたので、事前に各セッションに読者の振り分けを行っていた。1冊3人までという制限があり、本が5冊のため、どうしても読者があふれてしまう。研修会で学んだとおり、1冊4人以上になったセッションは講演形式のミニワークショップという形にし、本の方にも事前にそれについて説明を行なった。当日は申し込んだ15名全員が出席したおかげで、人の入れ替えをするなど混乱なく開始することができた。

1セッションの時間は30分であるが、本の方には説明時に、本からの話を20分にし、残りの10分を質疑応答に当ててほしい旨伝えていた。セッションとセッションの間を15分設けることにしたのは、30分で終了しない場合に備えるためと本の方に十分な休憩を取っていただくためである。30分間複数の読者を相手に、同じ話を3回繰り返し、質問に答えることは人前で話をすることに慣れていない人でもかなりの集中力と体力が必要となると考えられる。今回、実際に30分経過し、終了の合図を送ってもセッションを続けている光景がみられ、本の方を心配したが、互いに楽しんでいる様子であり、無理に終了させることはしなかった。

最後に1時間、読めなかった本の方と話をしたり、読者同士で交流をもち、振り返りをする時間をもった。その時間を利用して、参加者にポストイットに一言ずつHLに参加した感想やメッセージを書いてもらい、壁に貼った模造紙に貼付けた。表2は、その一部をまとめたものである。

感想からは、HLが目的とする多様性への気づき、自己の偏見に対する意識変容などがみられた。HL自体についても肯定的な意見が出された。

4. 参加者へのインタビュー結果

参加した本、読者、司書それぞれ2名ずつ計6名(順にB1, B2, R1, R2, L1, L2とする)に対し、HL終了後1ヶ月以内にインタビューを行なった。本の2名

は同時にインタビューを行い、残りは筆者と1対1で実施した。インタビューは、半構造化インタビューで、主な質問項目は、「参加理由」「参加しての感想」「『本』として出演してほしい方」「『読者』として参加してほしい方」「ヒューマンライブラリーの効果と課題」である。許可を得て録音し、スクリプトを作成した。その結果をまとめる。

4. 1 「本」の方 (B1さん, B2さん) へのインタビュー結果

本になった理由

B1さんが本になろうと思った理由は、第一に参加が大学生ということを知り、「なかなか出会えない層の人」であったということ、第二に自分の障がいのことを予め知っておいてもらえると、学生が就職して企業に入ったときに偏見が少なくなるかと考えたからである。学生は、「まだ柔軟な発想とか吸収力がある」ため「キーな段階」だと思ったという。最近の若い世代は、総合学習などで障がい者について学習する機会があり、偏見は少ないと思う反面、教科書やメディアなどでは限られたイメージができあがってしまい、インプットがあるぶん、現実の障がい者との乖離がある恐れのあることが心配であった。一方、HLでは実際に会って話をするので、イメージを打ち砕けるのでは、という期待もあった。

B2さんは障がいを知ってもらうより「私」を知ってもらいたかったという。つまり、まず、「何々さん」という個人を知って、その人の一部に障がいがあるだけであり、それが、人として出会うというHLの特徴的なところだと思ったので、参加することを決めたという。

二人とも、同じ名前の障がい者(例えば、聴覚障がい者、視覚障がい者)といっても男女の差、国籍の差ほど違いがあるため、個人を知ってほしいということであった。

参加しての感想

実際に始めてみると、二人ともどのセッションも雰囲気がよくリラックスした状態で始められたという。講演会と異なり、座って同じ目線で、3~4人に向かって話をするので、すぐに馴染んだという。またそのような雰囲気のせいか、読者側でも、自分もどこどこが悪い、とか同じ体験をした、などと自己開示をす

表2 参加者（読者及び司書）による感想とメッセージ

<p>社会を考えるきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までニュースで聞いても聞き逃していたキーワードについて、考えるよい機会になったと思う。今後、ニュースでこのワードができれば、きっと今回いた人は、しっかり見て考えることができます。 ・ ヒューマンライブラリーを通して国際理解へ。理解することでわかりあえる。 ・ 知らないことから偏見が生まれることを本の方から教えていただきました。 ・ 多様な人たちがいるからこそ、社会は豊かになると感じられました。 ・ だれもが住みやすいまちを目指して社会を変えましょう！
<p>自己を振り返る</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の知識が高まり、人生に良い影響となりました。 ・ 自分の経験ではない視点で、見ることを知り、よかった。 ・ 話を聞く前と、聞いた後で、イメージが変わったことがたくさんあって勉強になりました。 ・ 今まで知っているつもりで知らなかったこと、全く知らなかったこと、日本の社会の在り方を問いかけるようなことなど、最初から終わりまで刺激を多く受けました。 ・ 普段なかなかお会いすることができないような方々から直接お話を聞くことができ、視野が広がりました。 ・ ふつうに生きていたら気づかないようなことに気づくことができ、自分に新たな視点がありました。 ・ 自分とは境遇の異なる人の話を聞いて、その人の抱えている不満や社会の問題点をすべてわかったなんて思わないけど、今までよりは寄り添ってあげられる人になりたいと思いました。 ・ 自分と相手の個性を大切にしていきたいと感じました！ ・ これをきっかけに、今日見た世界を掘り下げていきたいなあ。
<p>読んだ「本」について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ (本が) 自分は代表じゃなくて、1つの例だと言っていたのが印象的でした。 ・ 本になってくれた方は、特別な人たちなのではなく、障がいとなることがあったからこそ、私たちが気づかないことに気づき、社会を変える力を持った人たちなんだと思う。
<p>ヒューマンライブラリーについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 20分ずつのトークでも、盛りだくさんでしたが、もっと聴きたいです！ ・ 同じ本の別の話題も読んでみたいなあ。 ・ 紙の本だと、気になったことや突っ込んだ話を読むことはできないけれど、生の本だと対話しながら読めるからいいなあ。 ・ このような機会をもっと多くの人に利用してほしいと感じました。

る人が何人もいたという。読者が自己を肯定できるようになったり、勇気を持てる一歩となったことがうれしかったという。「自分の弱さを見せるというのが必ずしも悪いことじゃないんだなと今日分かりました」という感想もあったという。

運営については、学生が司会を担当したが、ややたどたどしいところが緊張感を解いてくれたという。教職員が全面に出るよりは学生が担当するほうが場が和んでよかったという。セッションの時間については、B1さんは疲れやすい体質のためちょうどよかったが、自分達も「読者」として参加できればよかったと述べた。

「本」として参加してほしい方

参加する本について B1さん、B2さんとも同意見をもっていった。色々な方に参加してほしいが、本となる方の自己受容度によるという。自分の障がいを受容しきれていない人であると、攻撃的になり、自分が受けた差別体験を語ったり、日本の制度の未整備を訴えるだけになりがちで、それでは「第一印象として面倒くさい人」になるという。HLがマイノリティの権利主張の場になってしまうと、「読者」に偏ったイメージを植え付けてしまい、そこでまた偏見を生み出す可能性もあるという。「今日は一代表で、一人の人として来ている」という枠組みで話せるスタンスの人を本として発掘することがHLの課題であるとアドバイスいただいた

た。ゲストが「本」と呼ばれることについては、B1さんもB2さんも全く気にしておらず、むしろ「面白い」と捉えていた。

4.2 「読者」(R1さん, R2さん)へのインタビュー結果

「読者」になった理由

R1さんは、自分の研究テーマと本のタイトルが近く、将来テーマと関係する職に就きたいと考えていることから、是非生の声を聞きたいと思ったからである。また、自分の知り合いに本と似た方がいることも参加の理由であった。社会人であるR2さんは、単純に新しいものを体験してみたかったという。本を3冊予約する際は、普段の生活だと接する機会の少ないばかりだったので選択に迷ったが、最終的にはタイトルで選んだという。

参加しての感想

R1さんは、最初の説明時に、ルールとして本を傷つけないこと、とあったため、事前に聞きたいことをいくつか用意していたが、具体的にどのような言動が本を傷つけるのかが分からなかったため、聞けない質問もあったという。事前に具体的な例があったらよかったとのことである。R1さんはあるセッションでは、本の方からセッションを選んだ理由を聞かれ、自分にも重なるところがあり、語っているうちに泣いてしまったが、そのおかげで他の読者にも自分を理解してもらえ、話しやすくなった。複数の読者がいたため、問題意識の共有ができ、質問がまた別の質問を生み、思わぬ内容が出てくるということがあった。また、外国人でも、白人や英語話者に注目する人は多いが、そうではない外国人で日本にしっかり根付いている方の生の声を聞くことにより、多種多様な彼らから学ぶことは多かったという。

R2さんは、普段自分が接しない人達の話を書き、皆同じ課題を持っているし、たまたま違いが障がいという形で現れているだけだということを知ったのが新鮮であった。

「読者」, 「本」についての希望

R1さんは、あまり異文化の勉強をしていない、高校生、中学生にも参加してほしいと述べた。日本ではアウトプットの教育が少ないように思うので、交流しな

がら発言するHLのような機会が増えていけば、「もっと日本は頼りがいのある若者がたくさん出てくるのではないか」ということであった。さらに、政治家、特に地域の議員に立候補するような人にも参加してほしいと提案した。R2さんは、大学生、特に教職課程を専攻する学生に偏見を取り払ってから教職に就いてほしい、あるいは企業でも接客対応をする会社員、公務員に参加してもらいと述べた。

本になってほしい人としては、R1さんは、拉致被害者、フェミニスト、R2さんは科学物質過敏症の人、有機農業や自然農法に取り組んでいる人、イスラム教の人などを興味のある本として提案した。

4.3 「司書」(学生スタッフ)(L1さん, L2さん)へのインタビュー結果

「司書」になった理由

L1さんは、研究テーマと本の方のタイトルが近かったこと、事前にHLについて本を借りて読んだときに、コンセプトやスタイルに興味をもった。L2さんは、今まであまり会ったことのないような人達の話の聞くいい機会になると考えた。

参加しての感想

司書は2冊借りることが可能であったが、L1さんは面白いタイトルに興味をひかれたという。L2さんは「障がいを持っている人も持っていない人でも自分のことをもうちょっと受け入れるのが大事。直そうとするのではなく、今の自分でいいからとポジティブに受け取るのはいい考えであると思った。読者の数については「1対1よりは、自分が持っている疑問と違う疑問を持っている人もいると思うので」「読者の方からも得られることがあると思うので、何人かいたほうが」よいという感想を述べた。L1さんは、読者が複数いることで、他の参加者の考えをきけたり、どのような思いをもってHLに望んでいるのかが理解できてよかったという。ただ、「本を傷つけてはいけない」というルールに縛られ、周囲の人も質問を選んでいく感じがしたという。この状況を克服するためには何回かHLに参加することにより本の方に対する考えを変えていくことで判断できるのでは無いかと述べた。

5. まとめ

本プログラムにおいてそれぞれの効果について考えると、まず「読者効果」については、社会の現状や問題を考え、自己を振り返る効果が見いだされた。特にインタビューからは、読者が本との共通点を見つけ、自分にとってマイナスに捉えていた部分が個性の一つであり、生きていくうえで大きな自信となったなど、カウンセリング的效果をもたらしていることが分かった。偏見の低減については、大きな効果はみられなかった。今回の読者は事前に参加申込みを受け付け、本の予約をするという形にし、読者については主催者が把握のできる範囲の大学生及び、社会人であった。当日は欠席する者がいなかったという状況からみても、全ての読者が社会問題に高い関心と意識を持っている人達であることが想像できる。従って、読者を不特定にしたり、学校の授業などで参加を義務づけるような方法であれば、偏見の大きな低減効果がみられたのではないかと考える。

「語り手効果」については、B1さん、B2さんは既に社会で広く活躍しており、自己受容度も高いため、自分達が自信を深めたという以上に、読者に勇気を与え、そのことにより、満足感を得、自己を肯定する力になったと捉えることができる。その他の本についても、活発に社会活動を行っている方ばかりであるため、既にある程度の自己肯定感を持っていたと思われる。B1さんが言っているとおり本にとっても読者は出会う機会の少ない人達であり、自分のことを知ってもらうだけでなく、読者の日常生活や考えについて知ることができるであろう。「語り手効果」を期待する場合、人に語ることにまだ慣れていない方などを本として迎えることも一案であるが、B1さん、B2さんが指摘するとおり、ある程度自己受容度がある人でなければ、「読者効果」が期待できなかつたり、人前で話す段階でなかった場合、本自身が傷つく危険性もあることを認識しておかなければならない。

「主催者効果」については、司書役には、当日運営サポート、報告書作成に関わっていただいたが、本集めや事前に本に話を聞く、読者を集める、資金を募るなどの活動は行わなかったため、効果を検証することはできなかった。しかしHLに深く関わることで、研究関心の発見や就職を考えるうえでの材料に結びつく可能性も示唆された。

今回のHLの形式についてよかった点として、1点目は、予約制にしたことによって、当日本をめぐって競争になることはなく、時間通りにセッションを開始することができたこと、2点目は、30分という時間が「ちょっと足りないくらい」で適当であったことがあげられる。本にとっても、複数回セッションをすることを考えると30分がおそらく限界ではないかと思われる。

課題の1点目は、ルールとして「本を傷つけないこと」と始めに伝えたが、このルールにとらわれすぎて、本当に聞きたい質問を躊躇したり、ブレーキが掛かった可能性もあったことは残念である。2点目として、本対読者の人数比率であるが、今回のインタビューからは、読者が複数のほうが、別の読者の質問を聞くことで知識や情報に広がりやすかったり、他人の考えや反応を知る機会となるほか、読者同士の交流ができ、読者間の相互作用も有効的であることが示唆された。本プログラムにおいては、1対3が功を奏した形となったが、1対1にするか1対複数にするかは、それぞれに利点があると考えられるため、開催の規模や参加者の背景を考慮したうえで決めてもよいのではと感じた。3点目は、本も読者として参加する機会を設けることである。他の本がどのような人か、本同士の交流のためにも今後このようなシステムを設けてもよいかと考える。4点目は広報についてであるが、本を選択するにあたり、タイトルで決めた、という感想があったが、今回のHLではユニークなタイトルが多く見られた。確かに一般的に書籍を購入する際には、目を引くタイトルであると売り上げが伸びることがあることを考えると、どのようなタイトルを付けるかというのも重要な要素であると考えられる。

最後にHLの設定上の問題であるが、ゲストを本と見立てたり、「マイノリティ」と呼ばれることについては、本自身ほとんど気にしておらず、会場において偏見が助長されるような様子はみられなかった。一度の開催では多くを検証することはできないのは当然であり、リスクを恐れずに継続的にHLを実施し認知度を上げていくことが重要であると考えられる。

引用文献

浅井暢子(2012)「第4章 偏見低減のための理論と可能性」『多文化社会の偏見・差別—形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店

駒澤大学社会学科坪井ゼミ第29期生(2013)『平成25年度社会学科坪井ゼミ3年(29期生)共同研究報告書 共同研究 駒澤大学ヒューマンライブラリーサポートプロジェクト 2013』

駒澤大学坪井ゼミ編(2012)『ココロのバリアを溶かすーヒューマンライブラリー事始め』人間の科学社

坪井健(2012)「大学におけるヒューマンライブラリーの実

践ー駒澤大学坪井ゼミの取り組みから」『多文化社会の偏見・差別ー形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店

横田雅弘(2012)「ヒューマンライブラリーとは何かーその背景と開催への誘い」『多文化社会の偏見・差別ー形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店